三河地方大震災について

地元の方の体験から

昭和２０年１月１３日午前３時３８分、大音響とともに電燈も消えたので大地震とわかり、家のまわりがガラス障子ばかりであるので、破片であぶないから、起きて家族一同に、まず第一に、寝ていたふとんを出すように、わたしがたびをはき、足ではらいをして、ちょうちんをと、ろうそく、マッチをさがすにおおさわぎをした。

ちょうちんをともして、これで良しと、裏口を見ると、雨戸が１まい、半開きとなっていたので、その戸をはずして、家族一同をここより裏に出し、ふとん全部を出して、裏の竹藪に行くよう指示して、外に出ると、東で、M・I 氏が、

「前の K・I の家がつぶれた。」

と、大声でさけんでいる。これを聞いて、ただ一人で東の同家を見ると、たおれている萱葺き（かやぶき）の家であるが、中で大声を出して、助けを呼んでいる。息子の M 君は夜警で、公会堂詰所にいたところ、公会堂も倒れたので、家に来てみれば、倒れているので、ぼうぜんとしている。早く何とかして、中に入ってみるよう（言うと)、隙間があるので、さぐりながら声をたよりに奥に行く。母 K、S、T、I の４人が納戸の釣り鴨居にいて、４人とも下向きとなって押さえられ、母 K は、

「ふとんを取ってくれ。」

というが、取れない。わたしは、M 君に、山鋸にて根太の束を切り落とし、助け出すよう指示して、集落の被害状況を早く調べんと（していると)、西では、K・N さんの家が倒れている。呼んでも返事がない。その裏の I・K 氏の家が倒れ、その息子の Y が返事をしない。Y・K 氏宅も倒れ、主人の Y 氏が返事をしない。R・I の草葺きの家が倒れ、中にて助けを呼んでいる。その裏の S・I 宅も倒れ、妻 C さんが返事をしない。集落の中央にある浄円寺も本堂、庫裡ともに倒れ、S 上人は、腰を打ち、負傷せられた。妻の K さんは、奥のほうで、

「ここだ。ここだ。」

と、呼んで、助けを求めている。

寺より上の人たちも、浄円寺に来られたので、様子を聞くと、M・I 氏も家が倒れ、本人が返事をしない。Y・I 氏も家が倒れ、夫妻と子ども１人の返事がない。K･I 宅草葺きの家が倒れ､母 Y さんが中で助けを求めている。公会堂も倒れる。羽梨神社も、拝殿、渡殿、本殿ともに倒れる。その他の被害は、暗くて、詳細は不明であったが、以上の情報を村長とともに駐在巡査に報告、また、役場庁舎がぼろ家であったので、宿直員が倒れて、死

にはせんかと心配になったので、未だ暗かったが、自転車で駆けていく途中、市の漱橋をこすと、高圧電柱が倒れ、電線がたれていたので、首にひっかかり、自転車ともに溝におちた。不思議にも、別にけがはないので、急いで上六栗へ行くと、大騒ぎをしているが、別に大きな被害はないと聞く。豊坂学校はどうかと、遠くよりすかして見るに、倒れているようでもない。

役場につくと、ようやく明るくなり、役場も被害もなく、宿直員はB・S君であった。

野場消防団員が、三和村被害がえらいから、応援に行くと準備をしていたところ、逆川集落が大被害だと事情を話すと、

「それでは、全村消防団員に応援に行くよう連絡をせられたが、須美消防団員は、すでに室場村に応援に出たあとであった。

当時、わたしは豊坂村国民健康保険組合常務理事であったが、被害が逆川集落なので、主任となって善後策に苦心した。

同年４月１日に、豊坂村助役となり、５月には村長 T・N 氏満期退職せられ、後任村長ができないので、村長事務取扱をした関係上、震災復興には専心の努力をした。

被害状況

死者　Y・I、M・I、S・I、妻T、その子C、I・K息子K、　計７人。S腰骨損傷、H・S（電線首かかり十日間）

居宅の倒壊

M・I、K・I、A・K、Y・I、R・I、S・I、T・I、Y・I、M・I、N・I、S・I、公会堂、浄円寺本堂、庫裡、羽梨神社本殿、渡殿本殿

半潰以上

Z・S、Y・I、K・K、H・I、S・K

半潰以下

S・K、K・I、K・N、Y・N、T・I、Z・I、S・I、Z・I、K・I、K・K

復興について

豊坂村内の大工全員の協力をえて、居宅のない者に五軒の仮設住宅、また物置、鳥小屋を修復して、住宅となす。

半潰以上について

Y・I氏のあっせんで、名古屋より車力やとっておこし、すぐに大工により筋交いを入れ、柱を替えて、応急措置をして住むこととした。

死者の葬儀について

浄円寺住職佐橋上人負傷で、葬儀ができないで困ったが、１４日、わたしの父の一周忌法要で、長満寺渡辺上人、円性寺住職伊藤上人にたのんであったから、死者７人を大葬儀場において両上人にて葬儀を行った。余震は、時々あり、葬儀を終えて、わたしの家も傾いておるため、

「外にて法要を。」

と言うと、渡辺上人は、

「法要中にて死ねば、僧侶の本望である。」

ということで、家の中にて読経、法要をすました。非時（ひじ）の供応は、煮炊きができないので、供養の餅があるので、これを焼き餅として供応した。

１５日、死者のお骨上げは、私が導師となって、読経中に近親者にてしめやかなうちに拾い上げたが、感無量胸にせまった。

震源地の一部となる

当逆川は、震源地の一部となり、形原方面より震路を深溝小学校その下道祖神神社本殿を通り、西に向かい、西深溝南部の山添を通って、池の中央を抜け、逆川峠よりオイマＭ・Ｉ、Ｓ・Ｋの田を通って、桐山南部の山より西上、室場村、三和村方面にいたり、また被害甚大となった。この地震は隆起により、一田面にてもわかるように、五尺ないし六尺以上の差ができている。よって、逆川は、五尺ないし六尺の隆起となっていることと思われる。

復興物資について

復興物資については、幡豆郡一円、その被害甚大な所は、三和村、室場村、横須賀村、福地村、一色村で、その被害程度に応じて配給せられる。当部落は、他町村に比べれば、微々たるに過ぎないが、逆川としては、針１本、ローソク１本、食塩もない場合は、ニガリ水の配給をうけ、何一つ貴重な品物であった。

追記として、わたしが暗中災害調査に夢中になってかけまわっておる時にも、余震があり、皆々びくびくと恐れをなし、木々にとまって動けない人もあったというが、私は何の感じも恐れもなく動けたことは、神仏の加護があったではなかろうかと思われる。

（※一部記号に変更、および省略をしました。）